

教育実践と研究をつなぐ

三 木 四 郎

昭和44年4月の東京女子体育大学から始まり、大阪教育大学を34年間、そして、神戸親和女子大学の7年間と3大学での教員生活を通して、教員養成系での体育・スポーツに関わる教育研究活動を行ってきた。特に運動指導の基礎理論となる運動学を中心に体育科教育分野での研究が中心であった。中でも学生時代からの体操競技の経験を生かし、器械運動領域の専門家として平成10年と平成20年の文科省の学習指導要領の改善協力委員をはじめ、学校体育実技指導者中央講習会講師を20年近く勤めることができたことや、関西地区を中心に各教育委員会や体育に関する研究発表会での講演並びに講習会の講師として現場的な課題や問題点について意見や提案することが最も大きな役割であったように思う。

体育では運動を覚えることが中心的な学習内容になることから、運動指導に関わる理論と実践の統合が私に与えられた研究テーマでもあった。そのための研究方法としては、大学での実技指導を児童生徒の指導に置き換えているいろいろな指導法を試みることで、それを理論化して論文や体育の専門雑誌に発表することが私の研究の中心になっていた。大学教員は論文数で評価されることが多いが、研究は誰のために行うのか、研究の成果は教育現場に有効なものであるかを常に問いかけながらの論文発表を心がけたものである。体育関係の専門誌への掲載は現場の先生方に直接読まれることとなり、論文が指導理論として現場で使えるものでなければなかなか評価はされない。しかし、論文には、実践記録の記述だけで終わるのではなく、そこには理論的な背景が求められることになる。私の運動指導に関する理論は、現象学的人間学を基底に置く発生論的運動学の運動理論を基に進めることから、どうしても難解になりやすくできるだけ現場サイドに立って書くことを心がけたものである。

幸いにも、運動学の第一人者である筑波大学名誉教授の金子明友先生には大学時代のゼミ指導から始まり、50年近く師事することで発生論的運動学を今日まで学ぶことができたことが私にとって大きな財産になっている。学会活動としては、1987年に設立されたスポーツ運動学研究会が1993年には日本スポーツ運動学会として学術団体に登録され、その間1996年から2012年まで会長を勤め、スポーツ運動学の発展に寄与することができた。さらに、運動学に関する著書を単著1編、編著1編、共著1編を出版することで運動理論の啓発にも貢献することができたと考えている。

運動指導の運動理論には、2つの異なる基礎理論をもつ運動学がある。ひとつは、自然科学をベースに置く科学的運動学である。この運動学は、外部的視点からの運動理論であり、因果関係に基づいて終了した運動を理論化するため、子どもの内在経験として、どのように動こうとしているのか、どんな感じで動いたのかという動感世界やうまくいったとか、感じよ

く動けたなどの価値意識は分析対象から外され、子どもの動きの指導内容の理論にはなりにくい。

もうひとつは、人間学的現象学をベースとした発生論的運動学である。この運動学は、人間の身体を現象身体（〈今ここ〉に生きられた私の身体を意味する）として、運動主体の身体にありありと感じとれる内在経験がすべての研究の起点になる。人間の運動は、運動主体に動感化される多様な動感素材から一つの〈まとまり〉が形成位相の多くの階層を経て統覚化され、統一的な動感志向形態に至るという運動認識に立って、発生論的分析を行うことで運動理論化を目指すのが発生論的運動学である。この理論を用いることで子どもに指導すべき動きかたが明らかになってくるのである。

神戸親和女子大学の最後の1年間、これまでの研究のまとめとして器械運動の指導に関する本を発生論的運動学の視点から「器械運動の動感指導と運動学」と題して出版することができた。このことは神戸親和女子大学での多くの人々の支えと居心地のよい環境の中で充実した時間が過ごせたことによるものであり、心より感謝を述べたい。